2023 年 9 月 27 日
大東文化大学　非常勤講師
授業運営協力者　藤井誠一郎

第 17 回 全国大学政策フォーラム in 登別 参加報告

概要

2023 年 8 月 28 日（月）～8 月 30 日（水）の間、「第 17 回 全国大学政策フォーラム in 登別」が開催されました。

当該プログラムは、全国から学生が登別市に集い、現地に存在する多種多様な課題についての解決策（政策）を提案し、その質を競い合うという形で進められます。2006 年に始まり、政策系、福祉系、工学系等の多様な専門領域のゼミが同じフィールドを分析し、それぞれの視点から課題解決のための政策提言を行う大会であり、その老舗の位置づけとなっています。また、全国各地で同じような政策フォーラムが開催されていますが、議会が主導となって行われている点も特徴となっています。

2020 年度からは新型コロナウイルスの蔓延により中止となったり、ZOOM を利用したりして開催されてきましたが、2023 年は 4 年ぶりに対面で開催となり、従来どおりの実施形態で、2 泊 3 日で登別市内で行われました。1 日目はバスにて市内の視察、2 日目はヒアリング・現地調査と政策立案、3 日目は参加者の前での発表・公表、という流れで進められます。非常にタイトなスケジュールですので、予め事前準備を行っておかなければ、3 日目の発表に間に合わない状況に陥ります。よって、チームメンバーが確定する 4 月頃から事前準備を始めて臨んでいくため、長丁場で大変な労力を伴う取り組みになります。

この登別フォーラムへの参加は、2020 年度より「政治学インターンシップ（政策提言・登別）」、「政治学インターンシップ（政策提言展開・登別）」として単位認定されることになりました。また、2022 年度からは全学共通科目に「現代社会の諸問題」が設置され、そこで学んだ学生が登別フォーラムに参加する流れもできました。このような背景もあり、今年度は昨年度以上の参加者があり、Aチーム（小鎌春輝君、小保方朝陽君、小野塚朱音さん、松井陽菜乃さん、岡萌絵さん、三上恵子さん、池田智也君）の 7 名、Bチーム（赤池舞飛君、金内日向君、丸山仁衣奈さん、櫻井真衣さん、鬼塚優一君、海野和希君、池田葉月君、都所賢人君）の 8 名、合計 15 名が参加しました。

4 月にチーム分けをして、それぞれのチームに分かれて準備を進めていきました。近年のテーマは SDGs に絡むものが多かったため、さしあたりそこから学習を始めていきました。蟹江憲史『SDGs（持続可能な開発目標）』中公新書（2020 年）、を読んで纏めていく過程で SDGs についての知識を蓄積して準備を進めていきました。しかしながら、今年度のフォーラムで与えられたテーマは、「働く世代定住への方策　～暮らしたくなる『のぼりべつ』に向かって!!～」で、SDGs が直接的に影響するテーマではありませんでした。しかし、蓄積した SDGs の知識を武器にして、政策提言の準備を進めていきました。

2023 年のフォーラムには、8 大学（立教大学、青森中央学院大学、金城学院大学、同志社大学、摂南大学、大阪国際大学、大東文化大学、愛知大学、）と 1 専門学校（日本工学院北海道専門学校）から 15 チーム 109 人が参加し、政策提言を行いました。**結果については、受賞を逃してしまいました。**大変残念な結果に終わりましたが、参加者全員が貴重な経験を得られ、実りのあるフォーラムになりました。

事前準備

4 月にチーム分けを行ってから、それぞれのチームごとに勉強会を開催していきました。しかし、チーム運営に苦しみました。Aチームは他学部生の混成チームでしたので、東松山キャンパスと板橋キャンパスの距離があり、対面で集まる機会が持てず、ZOOM を利用して行う形を取らざるを得ませんでした。一方 B チームは 2 年生と 3 年生の混成チームとなりました。学年が違うとチーム運営が難しくなるのですが、鬼塚君がリーダーシップを発揮して、チームをまとめていきました。

概ねAチームも B チームも毎週水曜日にミーティングの場を持ちました。正課の授業の合間でもあり、大きな負担となりました。

登別フォーラム参加OBも参加

今回のフォーラムには、政治学科 2021 年卒の岡田悠志君（藤井ゼミ）が参加してくれました。ゼミの OB 会で登別フォーラムの話になり、今回協力してもらえることになりました。

岡田君は 2018 年の登別フォーラムに参加した経験があり、当時 2 年生だった岡田君は 1 人で参加して 3 年生の中に入って政策を考案してきました。また、発表を引き受け大役を果たした経験の持ち主です。現在は、さいたま市に勤務しており、わざわざ休みをとってくれ、後輩の指導にあたってくれることになりました。進捗が芳しくなかったAチームの指導に当たってもらうようにしました。

交流会の場で紹介される岡田君

後輩への指導の様子

1 日目　8 月 28 日(月)

集合は新千歳空港とし、実行委員会が用意して頂いたバスに乗車して登別に向かいました。北海道では、例年この時期になれば長袖が必要な状況ですが、今年度はかなり暑く、東京と同じような気候でした。

14 時 30 分頃に登別グランドホテルに集合し、４年ぶりの対面でのフォーラムが始まりました。1 日目はバスに乗って市内見学に向かいます。市内の雰囲気を車窓から見たり、要所では下車して現地の雰囲気を味わったりしました。

地獄谷の見学

雄大な札内大地

閻魔大王をバックにして

亀田記念公園の見学

その後、発表会場となるヌプルにて、交流会が行われました。市長の挨拶、議長の挨拶のあと、各チームごとの紹介が行われました。その際に最終日の政策提言の発表の順番のくじ引きを行いました。Ａチームが 12 番、Ｂチームが 9 番となりました。

Ａチームの紹介の様子

Ｂチームの紹介の様子

2 日目　8 月 29 日(火)

2 日目はヒアリングの日です。各チームともにヒアリング先に質問を投げかけ、現地の情報を聞き出します。A チームは、登別市社会教育G、こども育成G、社会福祉協議会、ゆめみ～る、文化スポーツ振興財団へのヒアリングを、B チームは、登別市土木公園G、企画調整G、道南バス、ヤマト運輸、室蘭警察署、漁業組合へヒアリングを行いました。

Aチームのゆめみ～るでのヒアリングの様子

Aチームの行政へのヒアリングの様子

Bチームの警察署へのヒアリングの様子

Bチームのヤマト運輸へのヒアリングの様子

ヒアリングを終えると、宿泊する登別グランドホテルに帰り、政策提言の準備を進めていきます。それぞれの部屋で深夜まで発表の準備を進めていきます。目途がついた頃に教員の前でプレゼンの予行演習を行い、ダメ出しが行われます。その指摘を修正しながら完成に近づけていきます。藤井はAチームを指導していました。全てが終わったのは夜が明けた 5 時 20 分でした。

準備を進めていくAチームの様子

3 日目　8 月 30 日(水)

わずかな睡眠をとり、8 時 20 分発のバスに乗り込み、会場となるヌプルに向かいます。20 分ほどのバスの中で爆睡するメンバーもいました。

会場に到着すると、プレゼンするパワーポイントファイルを提出します。Aチームは三上さんと池田君が発表し、小野塚さんがパワーポイントを操作しました。Bチームは鬼塚君が一人でパワーポイントを操作しながら発表しました。

Bチームの鬼塚君の発表は、パワーポイントを見ながらカンペを見ずに語りかけるような形でしたので、聞き手を魅了するクオリティの高いプレゼンになりました。誰もがそのプレゼンの質の高さを認める、入賞の可能性を感じるものでした。一方、Aチームにはハプニングが起こりました。作業途上のファイルを間違えて提出してしまい、発表者の言葉とスライドが一致せず、聞き手の理解が追いつかない状況となってしまいました。

両チームの発表内容を掲載しておきます。

【Bチーム】　「物流の革命児 - 無人ドローンが飛ぶ登別-」政策提言概要

登別市の課題として高齢化、人口減少、物流の2024年問題に着目し、あらたな物流手段としてのドローンを用いた政策を提言します。

現状登別市において人口は減少傾向にあり、高齢者の増加と働き手世代の流出が大きな理由となっている点に着目したうえで、働き方改革によるトラックドライバーの労働時間制限によって起こる運送リソースの減少とそれに伴う医療、建設現場への影響を考え新たな物流手段として無人ドローンをいち早く導入し、それを街の新たなブランドにします。

無人ドローン×登別市内の将来像として例をいくつか挙げれば、飲食業×無人ドローンで「ドローン版uber eats」や漁業×ドローンで「ドローン版魚群探知機」、新型コロナウイルス級の感染症の流行に対して人を介さずに医薬品を配送できるなど、様々な利用が考えられます。また登別市役所の人にも話を聞き、除雪の優先度をはかる際の目視確認を無人ドローンで代替するなどありとあらゆる登別市の既存産業×無人ドローンを掛け合わせる将来像を考えました。

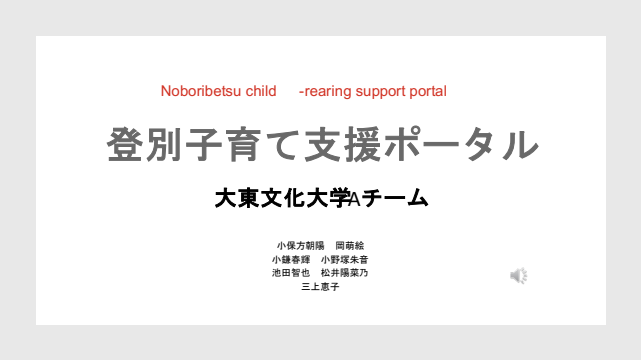
実現可能性の提示としては長野県伊那市の「ゆうあいマーケット」があげられます。伊那市がKDDIやゼンリンといった企業と協力し、地域に気軽に買い物に行きづらい高齢者などがテレビで注文し、無人ドローンが高齢者の自宅の近くの公民館などに配送。それを受け取りに行くことで気軽に買い物が可能という政策が行われています。この政策にはデジタル田園都市国家構想交付金（デジタル実装タイプ）が用いられ多額の初期費用を国家が支援してくれています。

また労働者人口の流出についても『登別市まち・ひと・しごと 創生総合戦略』のアンケート結果よりわかる通り、「働く場所」の少なさを理由に人口が流出していることが分かりました。登別市を「無人ドローン開発・活用の街」とし新たな企業や研究の場として使うことで働き手の流出を防ごうと提案します。

こちらの実現可能性としては福島県南相馬市の震災被害地域で行われている「ロボットテストフィールド」のアイデアを用いました。現在南相馬市では、震災被害にあった土地を再建する目的でアルソックやデンソーをはじめとした企業と東京大学、会津大学などが協力し、市の一部を企業の新しい事業や学校の研究に使ってもらい街としてのブランド化を進めるプロジェクトを行っています。

私たちの政策をまとめると、「無人ドローンを介して様々な世代が住みやすい登別市に」というテーマで政策を提言します。

【Ａチーム】　「登別子育て支援ポータル」政策提言概要



登別の現状の問題として、小学生の居場所が少ないと考え、小学生の居場所の拡充が必要ではないかと考えました。そこで、私たちは「登別子育て支援ポータル」の構築を提案します。それは、既存の制度を整理し直して、ポータル上に提示して一覧性を高め、新たな枠組みをバーチャルに作ることで、登別版の子育て支援を充実させる政策です。具体的には、①WEB 上にポータルサイトを構築し、既存の子育て支援事業のポータルへの組み込みを行います。②登別ときめき大学のコンテンツを小学生へ開放します、③各アクティビティを終了した時点で、成功体験を積ませる仕掛けを組み込んでいきます。

1　既存の子育て支援事業のポータルへの組み込みについては、現在ある子どもの居場所に関する施設の情報をひとつにまとめるサイトを作り、それにより、子育て支援施設の一覧性を高め、小学生の居場所を明示させます。具体的には子育て支援担当課のホームページにポータルを構築することを想定しています。

2　登別ときめき大学のコンテンツを小学生に開放していくことについては、子育てを通じて知的好奇心を子供に喚起させたいニーズに対応するために、小学生向けの新たな講座、カリキュラムを作成します。

3　成功体験を積ませる要素を組み込むということについては、子供に一つのことを継続してやり遂げたという達成感を味合わせることにより、新たに何かんい挑戦することへのハードルを下げます。そうすることで、小学生のうちから、自分の興味関心のあることに自発的に取り組む姿勢を涵養していきます。

これにより、小学生の子育てのバリエーションが増え、子供や親のニーズに沿った居場所が提供できます。このポータルサイトの利用を重ねていくうちに、満足度の低迷が上昇し、「安心して子育てができる」イメージが醸成されていくことが見込まれます。このように、「子育てしやすい町・登別」をアピールしていくことで、子育て世代の居住が進み、定住人口が増えていく可能性が見出せます。

Ｂチーム発表の様子

Ａチーム発表の様子

結果講評

今回のフォーラムでは、どちらのチームも入賞できず、残念な結果に終わりました。Ａチームについては、提出するパワーポイントファイルを間違えるミスにより、自滅する形となりました。Ｂチームについては入賞の可能性が高いと思っていましたが、テーマとなった「働く世代の定住への方策」という点では、的が少しずれていたのかと思います。それぞれのチームでは何が足りていなかったのかを今一度考えて頂ければ、そこにみなさんの今後の発展の素があるのだと思います。

今回は残念な結果に終わりましたので、両チームとも同じメンバーで来年度も出場してほしく思います。Aチームについては、再度自分たちの力のみで壁を乗り越えてほしく思います。Bチームについては、現在2 年生の方々がチームを引っ張っていく形で参加して頂きたく思います。そして是非とも来年こそは入賞を果たしてほしく思います。皆さんのリベンジを期待します。

参加学生の声

【Aチーム】

法学部　法律学科　3 年生　小鎌春輝　君

今回の登別政策フォーラムに参加させていただきました。最初私たちのチームは子供の居場所を確保することと経済的負担の軽減が大事と考え、ときめき大学を利用した第三の居場所作りと商品券事業を併せた政策を考えていました。私は商品券事業の政策を担当したのですが、財源はどこから確保するのかという課題を克服することができず、最終的にはこの商品券事業は政策提言に取り入れず、ときめき大学を利用した第三の居場所を作るという形になりました。チームに迷惑をかけた罪悪感と財源に関する情報をしっかり調べればチームに迷惑をかけずに済んだのではないかという後悔が今も残っています。

また、発表資料を作るときも、「誰かが作ってくれるだろう」という考えがあり、その結果、発表前夜に資料を１から作らなければならず、先生方にも迷惑をかけてしまいました。

他にも他大学の発表を聞いて、わかりやすい発表の仕方や見やすいスライドを作っており学ぶことも多かったです。

このフォーラムを通して、事前準備の重要性、自主的に動くことの大切さと人に分かりやすく伝える方法を学ぶことができました。特に、「何とかなるだろう」、「誰かがやってくれる」といった考えは、人に迷惑をかけ、後で自分を苦しめるということにつながります。こういったことを二度と繰り返さないよう、考えを改めて今後の人生を歩んでいこうと思いました。

法学部　政治学科　3 年生　小保方朝陽　君

私たちＡチームは「働く世代定住への方策～暮らしたくなる『のぼりべつ』に向かって！！～」というテーマに対して「子育て支援ポータル」を提案しました。私はチームリーダーという代役を任されて参加させていただきました。このようなチームリーダーは、初めての経験でしたのでうまく進めていけるか不安でした。チームとしての目標は入賞することでしたが、私自身は縁の下の力持ちとなってチームのメンバーに力を十分発揮してもらうことを大切に取り組みました。しかし、自分のリーダーとしての課題も見つかりました。みんなを引っ張って行く力が足りないと感じました。これからは上手くグループのかじ取りをしなければいけないと感じました。

今回訪問させていただいた登別市は、温泉地として知ってはいましたが規模や産業、必要なものなどの知識がなかったためそこを調べるところから始めました。人口が減少傾向であることから、働く世代が定着するには子育て支援が重要ではないかと考えました。それで子育て支援は重要なものであり、実現可能に近いものが作れたと思いましたが自分達の考えが足りませんでした。現地調査をしたのち初めに考えていた提言とは変更せざるを得ないことになってしまい、発表前日には提言をまとめる作業に追われてしまいました。

その中でもチーム一人一人が最後までやり遂げるために力を発揮し作り上げることができました。私はリーダーでありながらメンバーに支えられることが多く感謝しています。さらに、現地調査の重要性を感じました。自分たちが考えたこと現地の人の考えていることの乖離があることがわかりました。

事前の準備で実行委員会の方とメール連絡をしたり現地調査についてのやりとりをさせてもらったり普段ではできない経験をさせてもらいました。

入賞という目標は達成できませんでしたが、地方自治体の行政の一端に触れることができ提言をまとめることができたのは、指導していただいた藤井先生、岩橋先生、OB の岡田さん、協力していただいた登別市のみなさんのお陰と思い感謝しております。

今後はこのような企画や提案をする時には、相手の求めていることはなにか、自分がすべきことはなにかをもっと深く考えられるように努力していきたいと思います。

法学部　政治学科　3 年生　小野塚朱音　さん

今年のフォーラムに参加して学んだのは、最後の最後まで予断を許さず確認を徹底することの大切さ、直接会って話を聞くから互いの想いが伝わること、現地に赴き実体験を通して学ぶことが土地の魅力や特性の理解に繋がること、の３点です。

はじめに、確認の徹底はしすぎて損はしないこと。今回、私が更新前のデータを提出してしまったことで、肝心な場面で全てを台無しにしてしまうと身に染みて知りました。もう二度とこんな失敗をしません。今でもチームのみんなや先生方への罪悪感が拭えません。

昨年はコロナの影響で、参加者全員が一度に集まることはなく、zoom での発表であったため、今年初めて対面開催に参加しました。今年はチームの人数が昨年より多く、役割を分担し協力しながら準備を進めるこ

とができました。フォーラムのテーマが発表されるまでは SDGs について学びを深めたり、登別市の特色についてインターネットで調べたりしていました。

今年、私が大切にしたかったのは、様々な学部学科が集まるというチームの特性を活かし、個の力を最大限に発揮して協力すること。フォーラムに参加した他のチームは同じゼミのメンバーや学科で集まる可能性が高いと思い、私たち A チームは専攻分野が幅広いため色々な視点から考えを深められるのではないかと思っていました。

たしかに、事前学習から同じ題材について調べたり、発言したりする中で、各々の学びや専攻分野との繋がりを感じていました。しかし、その分アイデアや意見が発散しやすく、取捨選択し集約することが難しかったです。そこまでを自分たち自身でやり遂げてこそ、政策提言をやりきったと思いますが、先生方に助けていただいたことが多かったです。

チーム内で所属キャンパスが異なることもあり、4 月から始動しましたが zoom や LINE での連絡が多く、対面で会ったのは 6 月上旬が初めてでした。対面で会うことで、どういう背景や考え方を持っているのか、たわいない会話の中で少しずつ知ることが出来たように思います。その時期に私は人生で最も体調を崩してしまい、当初はリーダーとして参加する予定でしたが、他のメンバーに変わってもらうことになりました。この頃は現地調査に行けるかも分からない状態で、自分にできることを少しずつ増やしながら生活していました。中々体質に合う薬が見つからず、日常生活に支障がなくなるまで回復したのは 8 月中旬のことでした。そして、藤井先生と OB の岡田さんに zoom にも何度も参加していただき、現地調査の際もアドバイスをいただいていました。学生内で話が煮詰まることが多く、特に考えていた政策の実現可能性が低そうになったとき、他力本願な部分が強く出てしまったように思います。

発表前日のヒアリングでは、事前にメールでお聞きした質問の回答をしていただいたり、私たちのチームの提言に対して意見をいただいたりしました。対面だからこそ聞けた話や登別に住み、働く方の声が聞けたことで、当初予定していた政策を変更することになりました。2 日目の夜、チームで集まったのは 19 時。全員で話し合い意見をすり合わせながら、資料を作り、原稿の読み合わせをし、気づけばいつの間にか発表当日の朝 5 時になっていました。資料作成が終わり、安心しきっていました。

会場で PowerPoint のファイルを入れ、他の班の発表を聞き、「同じテーマなのにこんなにも着眼点が異なり、解決したい課題に対してのアプローチもさまざまで面白い」発表順が来るまでそんなことを考え、緊張と高揚した気持ちが半々でした。発表の準備をして、PowerPoint のスライドショーにした瞬間、夜通しかけて 16 枚作ったはずのスライドの数が 13 枚で、頭が真っ白になりました。始まったからにはそのまま進めるしかなく、「せっかくみんなで頑張ってきたのに台無しにしてしまった」という罪悪感で自責の念に駆られました。

今回の経験を通して、念には念を入れ確認をすることの大切さを痛感しました。できることなら来年、同じチームで今度は全員で発表の舞台に立ち、リベンジしたいです。指導教員である藤井先生、OB の岡田さん、A チームのみんな、たくさんの気づきや学びをありがとうございました。

最後になりましたが、こんなにも多くのことを学ぶことができたのは実行委員会のみなさまのおかげです。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

国際関係学部　国際文化学科　3年生　松井陽菜乃　さん

私が政策フォーラムを終えて学んだものは２点あります。

１点目は、対面での話し合いの重要性という点です。私のチームは他学部多学科の混合チームでした。様々な視点からの意見提案をすることができるチームで勉強になることも多々ありました。しかし、キャンパスが異なるため zoom での話し合いが主なものでした。授業以外の時間では全員の予定がなかなか揃う機会がなく、全員が揃ったのは北海道に行ってからでした。Zoom での話し合いで事前準備を重ねていましたが、相手の反応を見ながら話し合いができないというのは少しやりづらさを感じました。また、事前のヒアリングについてもメールでご回答いただいたものもありましたが、やはり、現地での生の声を聞くことで相手の目を見て話を理解できるのでその点でオンライン上と対面での決定的な違いを感じました。

２点目は、様々な視点からの考え方があるという点です。グループでの話し合いで意見交換などの際に同じものについて考えていても全く違った視点からの意見が出てきて大変興味深いと感じました。本番の日にも他のグループの発表を聞いた際にもグループでは上がらなかった考え方もあり、このような見方もあるのだなと感じました。また、発表の仕方も皆さん趣向を凝らしており、大変勉強になりました。

今回全国大学政策フォーラムに参加して様々なことを学ぶことができました。他学部からの参加で大変緊張していましたが、チームをはじめ、たくさんの方にお力添えをいただき大変いい経験をする事ができました。本当にありがとうございました。

国際関係学部　国際文化学科　3年生　岡萌絵　さん

登別政策フォーラムでの経験は当初自分が思い描いていた以上にハードで大変な経験となりました。今回のフォーラムでは事前にチームで考えていた政策が現地でのヒアリングで実現不可能だと知り、一から政策を練り直しました。練り直す作業は時間がない中で行ったため、かなり難しかったのですが、その経験のおかげで臆せず議論で発言することができるようになり、さらに、物事を柔軟に考え、現状を把握する力が身

につきました。最終的に悔しい結果とはなりましたが、自分たちで考え出した政策を登別市の方々や、他大学の方々に発表した経験は自信に繋がりました。

そして、今回のフォーラムを通じて私が何より重要だと思ったのは意見をすり合わせる能力です。自分の意見を述べることももちろん大切ですが、それにプラスして他の方の意見も取り入れることでチームの方向性はまとまっていくと感じました。意見をすり合わせる能力が私には足りないと思うので、これからのグループワークなどではそれを意識していきたいです。

最後に、藤井先生、岩橋先生をはじめとするすべての関係者の皆様に感謝申し上げます。この経験を私のこれからの学生生活、そして就職先に活かしていきたいです。

国際関係学部　国際文化学科　3年生　三上恵子　さん

私は今年度初めて登別政策フォーラムに参加させて頂きました。私は国際関係学部に在籍し、日本以外のアジア各国の政治や文化、歴史、言語を中心に学んでいます。そのため、今回のフォーラムに参加するまでは、日本国内に目を向け、政策を考えるということをしたことがありませんでした。私はこのフォーラムを通して、教科書では学ぶことができない、人生の糧となるような学びを沢山しました。このフォーラムで学んだことを２つ述べたいと思います。

1 つ目は、現地で調査することがいかに大事であるかということです。政策を考えるにあたり、インターネットや SNS を用いて、少しずつ登別市について調査を始めました。しかし、それらを通した調査には限界があるとすぐに気が付きました。自分たちが知りたい世代のアンケート調査が不足していたり、インターネット上には最新データが存在していなかったりしました。特に困難さを覚えたのは、政策の案がいくつか候補に挙げられる中で、本当にそれは登別市の人々が望む内容であるのか、登別市らしさがあり、登別市でその政策を行う意義はあるのか、という疑問にぶつかった時でした。データでは知ることのできない思いや登別市で生活する毎日について、登別市の人々により詳しく、直接聞きたいと強く思いました。また実際の現地調査でも、現地で声を聴く重要性を強く感じました。なぜなら、私たちのグループは現地調査をし、当初の政策案では実現が不可能であると分かったため、発表の前日に政策を一から考え直すことになったからです。これがもし実際の政治だとしたら、どうでしょう。計り知れないほどの、時間やお金、人員を無駄にしてしまうかもしれません。これはこのフォーラムに限らず、私が学ぶ国際問題についても、同じことがいえると思います。例えば、国を超えた開発や、難民のかたの支援が挙げられます。現地に赴き調査をすることは、現地のニーズに答えられるだけでなく、限られた資金をより効率よく運用させ、その政策をより機能させることに繋がると学びました。

2 つ目は、チーム作業をするときは、チームでの最終目標を決めるべきだということです。このフォーラムへの参加が決まり、チームの顔合わせを行ったのは 4 月でした。そこから発表当日まで、およそ週一回 zoom を行い、4 カ月かけて準備をしました。4 月の時点では自分も含めて、本番まで 4 カ月もあるから、どうにかなるさと他人任せで、このフォーラムをどのようにゴールしたいかの熱量に差があったと私は思います。もちろん発表の日が近づくにつれて、この熱量の差はなくなっていきましたが、全員が足並みを揃え、初めから同じ目標を目指していたら、議論がより早い段階で盛んになったと考えます。また、チームの特性である他学部混合であるということを生かしたアイデアを生み出せていたと思います。チームで作業をすることで、お互いの強みを生かし、苦手な部分も補い合うことができると私は考えます。しかし、それをより機能させるためには、全員が同じ目標をもち、それに沿った計画が必要不可欠であると、このフォーラムを通し学びました。社会人の一員になり、チームで作業する際には、その企画の目標や意義をチーム全員で、最初に共有したいと思います。

私は、このフォーラムで 100 人を超える人の前でプレゼンテーションを初めて行ったり、結果的に無くなりはしましたが、自分が考えた案を実現させるためにメンバーと形作っていく楽しさを味わったりもしました。今回学んだことや、経験したことの全ては、間違いなく、この先の私の人生に活かすべきものになりました。最後になりましたが、このような貴重な機会を企画してくださった、登別市の実行委員の皆様や現地調査にご協力いただいた方々、最後までご指導くださった先生方、チームの皆様に改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

社会学部　社会学科　3 年生　池田智也　君

全国大学政策フォーラム in 登別に初めて参加させていただきました。残念ながら賞をいただくことはできなかったですが政策を作成する経験、100 名を超える人の前での発表という貴重な体験をさせていただきました。

この 4 か月を通して私たち A チームは生産年齢定住という課題にどのような政策が効果的なのか考え、子育て支援政策の充実が必要だと考えた。事前調査の際、最も私たちを苦しめたのは予算をどのように作るかであった。私たちは子供の居場所づくりと子育て世帯向けのクーポンの配付の二つをベースにした支援を考え、チーム内で二つのグループに分けた。私は子育て世帯向けのクーポン班で新しく補助を作るために、全国の子育て支援パスポート事業や登別の商店街で行われている商品券事業について役所などにメールを送り調査を行った。いくつかの役所からは返信のメールを頂けなかったが多くの役所に回答をいただき、そこで得た情報をまとめ実際にどれほどの予算があれば政策として実現可能になるかどのように予算を作るかを考

えた。しかし、事前の調査の段階で藤井先生や特別に私たちに協力してくださる事になった岡田先輩に予算の問題で実現がほぼ不可能ではないか、政策を考え直したほうがいいのではないか、と指導を頂き開催直前に別の案を考えることになり事前の調査が不十分になってしまった。

現地での調査が始まり初日の登別市内の観光や二日目のいくつかの団体に行ったヒアリングによって政策の方向転換をすることになり、二日目は徹夜で作業をすることになった。事前に調べたことをうまく使えなかったため私たちの想定していた形の政策とは別の形になった為内容がうまく詰め切れなく、発表の練習も全くできず自信をもって発表することが出来なかった。今回私たちは登別がどのような市なのかうまくイメージが出来ないまま現地に来てしまったためこのようなことが起きたと私は思う。

このフォーラムを通じて私はインターネットで調べるだけでなく実際に街を歩き、人から話を聞く事でより内容に奥深さが生まれること実感しました。また、４か月と短い間だったが他学部のチームメンバーとの議論により異なる視点や社会学部では学べないことを体験することが出来ました。

最後になりますが、フォーラムを開催してくださった関係者の皆様、ヒアリングに協力してくださった登別の皆様、私たちのためにご指導してくださった藤井先生、岡田先輩、ありがとうございました。至らぬ点も多々あったかと思いますが今回の経験で学んだ事、実際に 100 人を超える人の前でプレゼンテーションを行った経験をこれからの学習、就職活動に生かしていこうと思う。

【Bチーム】

法学部　政治学科　2 年生　赤池舞飛　君

全国大学政策フォーラムに参加させていただきとても良い経験になりました。私たちのチームは惜しくも入賞することができませんでしたが、ZOOM を使った事前ミーティングや対面での話し合いを行い、チーム一丸となり最後まで妥協せずに取り組み当初の目的であった唯一無二の提言をすることができました。

現地に直接行って学ぶといった自分自身初めての体験にとても魅力を感じました。二泊三日の現地調査では、インターネット上での情報ではわからない現地の声を直接聞くことができ、登別市の現状や課題、登別市で働いている様々な業種ごとの意見を把握することができ、私たちのチームが行う政策提言が当初の提言より内容があるより良い政策が提言できたと感じます。この経験を今後の学びに結びつけていきたいと思います。

今回の登別フォーラムを通じて自分とは違った考えを持つ他大学の発表や豊富な知識量と経験でチームを牽引してくれた先輩方に触れることができ、自分自身さらに成長していかなくてはならないと感じることができました。

最後に今回全国大学政策フォーラム開催するに当たって運営や学びの機会を提供していただいた皆様とサポートしてくれたチームメンバーや先生方に感謝いたします本当にありがとうございました。

法学部　政治学科　2 年生　金内日向　君

登別政策提言フォーラムに参加させていただき、自分自身、本当に貴重な経験ができました。普段の授業とは違った形で、登別についての事前調査や提言内容の立案などチーム全員で協力し合い、1 つの案を作り上げていくことの難しさ、より良いものを作り上げていくために細部まで凝り、入賞を目指していくことの大変さといった参加しなければわからなかった困難なことが多くありました。ただ、それ以上に日頃のチーム会の中での対面での話し合いや Zoom を使ったミーティング、また、実際に登別市でのヒアリング調査などを踏まえ、登別をさらに良い街にしていくために何ができるかということを考えていくことの楽しさというのも実感することができました。知識の豊富で、行動力のある先輩方や、自分とは違った自分にはない考えを持った同級生とこの登別政策提言フォーラムに参加し、自分自身ももっと成長しなければいけないなと感じることができました。

この登別政策提言フォーラムに２年生で参加させて頂き、結果としては入賞できず悔しい気持ちがありますが、この登別政策提言フォーラムで学んだすべてのことをこれからの学校生活や私生活の部分にも活かしていけるように、参加してよかったと思えるように過ごしていきたいと思います。

最後に、登別政策提言フォーラムの開催に際し、尽力いただいた皆さんや、登別政策提言フォーラムに関わる全ての方々に感謝したいと思います。この３日間が自分の人生にとってとても大きな経験や思い出になりました。本当にありがとうございました。

法学部　政治学科　2 年生　丸山仁衣奈　さん

今回初めて政策提言フォーラムに参加しました。私自身、初めての政治学インターンシップへの参加でもあったため、自分に何ができるか不安に感じている部分もありましたが、先生に相談した際に後押しをしていただき参加を決めました。

事前準備として、前期の授業時間を利用して毎週チームで集まり、各自が調べた内容を発表して意見を交換し合いました。私どものチームは政治学科の２.３年生で構成されたため、知識や経験が豊富な先輩方と自分と異なる視点を持った同級生と共に調査することができたこと、恵まれた環境で実際に政策を作り上げる過程を経験できたことは、大変貴重な機会であったと感じています。また、事前準備の段階から同じ学科の

先輩方のお話を聞き、話し方や考え方を勉強できたことが嬉しかったです。
今回、提言を作り上げるためにさまざまな自治体の方にお話を聞く機会をいただきました。オンラインでのやり取りではありましたが、学生が自治体の職員と直接お話しできる機会は貴重であるため、自治体の視点からの意見や実際の政策について聞くことができたのは大変勉強になりました。また、質問に対しても親身になって答えてくださり、自治体職員として働くことに関心を持つきっかけとなりました。
現地での調査では、初めて登別市を訪れ、それまで調べてきた資料とは異なる実際の暮らしを体感することができました。フィールドワークは初めての経験でしたが、ただ受け身で話を聞くのではなく主体的に行動すること、自分が抱いた些細な疑問も追求しながら調査していくことの大切さを学びました。
フォーラムの当日は、チームで前期の期間で作り上げてきたことが実際に形になって発表されることに感動しました。私どもの提言も自信を持って挑みましたが、フォーラム自体の共通したテーマがある中でもチームごとに問題意識の捉え方や視点が異なっており、発表の仕方も工夫されていて、他大学の発表から学ぶことも多くありました。
政策提言フォーラムへの参加を通し、自分自身の足らない部分や伸び代を発見することができました。この経験をもとに今後の勉強や就職活動で自分の力が発揮できるように精進していきます。
最後に、政策提言フォーラムに参加する機会を提供してくださった先生方、チームの皆様、協力してくださった登別市をはじめとする自治体の皆様に改めて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

法学部　政治学科　2 年生　櫻井真衣　さん

私はインターンシップを初めて履修しチームでひとつの目標に向かって協力し合うことが初めてだったのでチームの力になれるかとても心配でした。
しかし、リーダーをはじめ、先輩方や同じ学年の仲間には、何度もお世話になり、自分が何を調べれば良いのかを具体的に指導し、自分が調べきれていないところをフォローしてくださり自分の成長を助長してくださったことに感謝しております。しかし甘えてしまった部分も多くありましたし自分が提供した情報が十分であったか不安も感じていますが、それが今後の成長への課題と受け止めています。
今回の結果は賞を受け取ることができず以前からこの発表に向け多くの苦労と時間を費やいてきたこともあり悔しい思いをしましたが、このチームの一員として共に過ごした日々の中で、その目標に向かって前進することができたことを嬉しく思います。また、このチームだけではなくライバルの大学チームの発表から自分には無いアイデアやプレゼンの工夫も学ぶ事ができました。
今回このようなフォーラムに参加したことで個人の頑張りだけでは得られない仲間との協力性、主体性を学ぶことができました。将来もこの経験を生かし社会に貢献できるよう頑張ります。
ありがとうございました。

法学部　政治学科　3 年生　鬼塚優一　君

私が登別で得たこと、学んだことは、現地で体感・体験する学び、現地住民へ直接お話を聞くことの重要性と、このような学生の取り組みに協力してくださる登別市の温かさです。
体感・体験する学びの重要性の観点では、登別市内をバスで移動することで、Google ストリートビューや国土地理院の航空写真や等高線では十分に理解出来なかった市内の高低差などの地理的特徴を体感しました。また、登別市の食材、地酒、温泉など、登別市の特色ある産業を楽しみながら体験する事で、登別市の魅力を実際に感じることが出来ました。
現地住民へ直接お話しを聞くことの重要性では、ヤマト運輸の方々に聴いたヤマト運輸株式会社が行っている 2024 年問題への対応策や再配達問題の現状、従業員の充足率についてなど、直接会ってお話を聞くからこそ、インターネット上や電話やメールでは知ることができないお話を聴けました。
また、登別市の除雪業務を行っている登別市役所の担当者の方に直接お話をする中で「登別市の除雪は人間の目で確認して、除雪の優先度を決めているんだよ」ということを教えていただき、私たちの提言する内容を補強できる点を見つけられました。
さらには、登別市の漁業組合の方に直接お話しをお伺いすると「最近は海水温が上昇することで、いままで取れていた魚が取れなくなり、より南で取れていたような魚が取れるようになってしまった。漁というのはその土地で取れる魚ごとにその土地の食文化があり、その土地で永年取れていたからブランド価値が生まれるものなんだ。取れなかった土地で良い魚が取れたとしても稼ぎになるとは違うんだよ」と教えていただきました。我々の政策に活用できる内容ではなかったですが、私の中でない視点を教えていただけので、非常に印象に残っています。
私たち学生が、実在する地方公共団体に向けて政策を提言する貴重な機会を作ってくださる【全国大学政策フォーラムin登別】関係者の皆さまや､既存業務の時間を割いて我々の質疑に答えて下さった室蘭警察署、ヤマト運輸、道南バス、漁業組合など登別市の皆さまだけでなく、福島県庁、南相馬市役所、長野県伊那市役所の皆さまには私たちの政策提言にご理解をいただくとともに、多大なるご協力をいただきました。学生の活動をここまで多くの大人の方々に応援していただけることを実感し、大変嬉しく感じました。関わりいただいた皆さまに感謝するとともに、自分もそのような大人になりたいと思いました。
最後に、結果は悔しいものに終わりましたが、スライドの構成、事前準備、プレゼンテーションなど、チ

ームメンバーと協力しながら行えたことは財産になりましたし、プレゼンテーション終了後に多くの先生方や登別市議会議員の皆さまからお褒めの言葉を頂けた点も、自分たちの政策を伝えることができて良かったです。しかし、結果は結果ですので、採点の詳細などを見ながら分析を行い、同様の機会に活かしたいとおもいます。

法学部　政治学科　3 年生　海野和希　君

４月の顔合わせから大東文化大学 B チームは登別の現状を知るよりも前に、「どんな政策提言をしたいか？」というビジョンを話し合いました。その中で出た答えが「どのチームにもない革新的で独創的なアイデアを用いて、自分たちの記憶に残ることをしよう」と意見がまとまり発足しました。最初の内容は“空飛ぶクルマを用いた理想の交通手段”でした。しかし、登別の現状を照らし合わせたり、実現可能性や市議会議員さんたちへのアプローチとして、もう少し親近感のある議題にするため８月に大きく方向転換し“無人ドローンと地元の産業との∞の掛け合わせ”をベースに作り変えました。

私たちの考えたこの両テーマはどう政策に結びつけるのか&どう実現可能性を分かり易く伝えることが鍵になると同時にチームの悩みどころでした。もちろんより先進的な事例を知るためにも、国内だけでは収まらず、私の担当分野は海外での活用例だったため、実証実験や今のモビリティ業界がどこまでできるのかを調べ、プレゼンをする上で皆に必要な知識を刻む役割を果たしていました。他のチームメンバーも国内の自治体に直接連絡を取って回答を基にした実現性を高めたり、今自治体で行っている業務の日常に、無人ドローンと組み合わさることでのメリット・デメリットを探ったりと多角的な視点から情報収集を行いました。いいことだけではなく、むしろプレゼンの不完全な箇所を埋めていくような形で、段取りよく進行できたのはリーダー鬼塚さんのおかげでもあり、今後の経験にもなりました。

政策フォーラムでは入賞できず悔しい結果となりました。ただ、審査員の方や藤井先生の最後の言葉で入賞していてもおかしくない発表と言葉を頂けたのは嬉しく思いました。また結果が不完全燃焼でもここに至るプロセスは最初のビジョンの通り満足のできるものであり、私たちだけの政策提言を始めから突き通してやってきたことは価値のあることだと認識しています。付き添いの岩橋先生、藤井先生、チームメンバー、そしてご協力いただいた登別市の方々のおかげで実りのあるインターンシップを終えることが出来ました。本当にありがとうございました。

法学部　政治学科　3 年生　池田葉月　君

今回、藤井ゼミの一員として登別政策フォーラムに参加させていただきました。事前に準備した中では自分のチームの提言の出来がすごくよく見えて、いい所まで行くのではないかと考えましたが、惜しくも賞は取れませんでした。リーダー含めて他のメンバー、二年生たちも頑張ってくれていたのですごく悔しいです。

個人的には今回の審査は「どれだけ地域に寄り添った提言ができていたか」という点の比重がすごく大きかったのではないか、と考えています。実際今川賞を受賞した日本工学院さんは登別市に住んでいないと目につかないであろう、赤字温泉街の再活用というテーマで政策提言を行っていました。何か媒体を挟んでの調べ学習と、現地に降りての視察、ヒアリングとでは大きく違うということを学びました。実際に活動してみないと分からないものは少なからずありました。住んでいないと見えない課題を知り、それを実際に提言するという行為の難しさは、初めて政策フォーラムに参加した自分にとっては大きな問題になりました。

自分たちの政策がどう活用されるのか、どう実現されるのかを納得してもらわなくてはいけないということを、現地の人とのヒアリング調査で特に実感しました。実際にヒアリング調査をしてみて自分たちの政策にビジョンが浮かびづらい職業の人たちに対して、様々な視点からの回答が必要でした。自分は特にこの場面で多面的な視野を持つことができず大失敗していて大きな経験になったので来年、再来年と政策フォーラムに挑戦する人たちにも政策提言の難しさを肌で感じてほしいなと思っています。

感想としてはこの充実した三日間で己の未熟さ、勉強不足を肌で感じました。斜め上の発想について新たな知識をぶつけてこられて高いレベルでの議論が交わされる現場に居合わせられたのは幸運でした。悔しさもありますが、きちんと自分の頭で考えることの楽しさも同時に感じられると思います。フォーラムが終わった当初は自分の使えなさを情けなく思っていましたが、こうして感想を書いている今はそれが大きな糧になったと考えることができています。

現状この政策フォーラムは大学内でも認知が進められています。私は藤井ゼミに参加したことで、幸運にもこの機会に触れることができました。知らないのがもったいないくらい貴重な経験ができるので、ぜひ政治学科内の人で挑戦してみたいという人が今後出てきて活発な活動になっていってくれたらうれしいです。

法学部　政治学科　3 年生　都所賢人　君

今回、初めて登別政策フォーラムに参加させていただきました。今までの自分はこういった学生主体の活動への参加はしたことがありませんでした。また、参加しようと思ったこともありませんでした。しかし、三年生になり環境が全く変わることによって自分も何か変わりたいと思い、参加することを決めました。

最初は参加メンバー達の意識の高さに圧倒され、自分の未熟さを痛感しました。それと同時に、自分のなかに何か新しいことに対する高揚感を感じたことを今でも覚えています。幸いなことに自分は班員に恵まれ、班での役割や活動を通して、自分の不甲斐なさを実感しつつも目標に向けて突き進むことができました。

フォーラム 1 日目、実際に登別市を訪れ感じたことは、人が少ないでした。どこか、地元の群馬県を思い出す懐かしく寂しいような気持ちを感じました。2 日目に登別市の方々のお話を聞き、労働力の減少や高齢化についての厳しい現実が分かりました。これも参加したからこそ得られた貴重な経験であると思っています。

最終日の政策発表では、他大学の多様な方向性からの政策に感心しつつも、自分は自分達の政策に自信を持っていました。頼りになる班のメンバー達が頑張って作り上げた政策なら賞に届くはずと確信が持てるほどでした。審査の結果は自分が思っていたようにはいかず、本当に悔しかったです。ですが、フォーラム終了後のやり切った達成感は今までで感じたことのないほどでした。

最後に、今回の登別市政策フォーラムでの課題はこれから先、日本の各地で起こることであると自分は感じました。現に少子高齢化や労働力の減少、若者の地方離れは社会問題となっています。今回の経験は将来に活かしていくことができるとても有益なものになったのと共に、自分自身を大きく変えることができた素晴らしいものでした。このような機会を与えてくださり本当にありがとうございました。

OBとして参加頂いた　岡田悠志　さんより

今回、OB として当フォーラムに参加させていただきました、岡田悠志と申します。大学生時代のゼミの指導者であり、私の恩師である藤井誠一郎先生にお招きいただき、微力ながら後輩の皆さんへのサポートをお引き受けいたしました。

私自身、2018 年に当フォーラムに参加し、政策立案の厳しさと難しさ、楽しさを経験し、この政策フォーラムは大変素晴らしい取組みであると認識しております。

OB として参加するにあたり、学生さんたちに、この取組みを通じて様々な経験を積んでいただき、今後の成長への一助となるよう全力でサポートいたしました。

メインで指導を行なった A チームについては、政策立案という、当フォーラムの根幹であり、かつ高い壁にぶつかり、発表当日の朝まで頭を悩ませたことだと思います。そのような厳しい状況でも最後まで諦めずに、発表を実施できたことは、学生時代に力を入れて頑張ったこととして胸を張れることだと思います。是非、この経験を糧に学業や就職活動、その先の人生に活かしてください。

OB という枠で参加させていただき、指導側の厳しさというのも、ほんの一部ではあると思いますが体感することとなり、大変貴重な経験となりました。

最後になりますが、お誘いいただいた藤井先生、引率の岩橋先生をはじめ、学生のみなさん、暖かく迎え入れてくださった実行委員会の皆様や登別市の皆様に感謝を申し上げます。とても心が躍るひと時でした。ありがとうございました。

おわりに

この原稿を執筆している私、藤井は、2023 年 3 月に大東文化大学を退職し、4 月より立教大学に移りました。担当すべき科目であった「政治学インターンシップ（政策提言展開・登別）」を担当することができなくなり、また、退職を申し出る時期が遅くなったため代わりの教員の確保ができず、岩橋先生にご担当頂きながら、私は支援する形で今回のフォーラムに関わりました。2024 年度からは立教大学の学生を率いて登別フォーラムに出場するため、今回が大東文化大学のチームを率いて出場する最後の機会でした。今回のフォーラムで大東文化大学のチームを入賞に導くことができず、残念でなりません。

このような報告文を書くのも最後の機会となりますので、私の思いを伝えさせて頂こうと思います。

大東文化大学に着任した 2015 年から学生を率いて全国大学政策フォーラム in 登別に出場してきました。当時は、希望者を募り参加する形でした。そこで学生の皆さんから言われていたのが、「どうせ出場しても●●大学には負ける」「▲▲大学にはかなうわけない」「●●大学や▲▲大学や◆◆大学と競い合っても勝てるわけがない」といった言葉でした。私はこのような言葉を聞いて大変残念に思い、学生の意識を変えていく必要性を痛感しました。社会に出たら実力勝負です。自分次第で、如何様にも進化・発展を遂げていき、自分の人生も変えることができます。「取り組む前から負け意識を持っていては、今後社会に出て活躍できない」「そのような学生の意識を変えていく必要がある」と思い、登別フォーラムで徹底的に汗を掻かせ、入賞を掴ませ、成功体験を積ませて自信を持たせようと思って指導してきました。そのために、時には自分も学生のチームの中に入って引っ張っていくこともしました。それだけやっても入賞できなかったこともありますが、真剣に取り組んで発表まで辿り着いた学生の皆さんは、何か一つのことをやり遂げた成功体験を得られ、「やればできる」という「自信」を得て頂けたのではないかと思っています。その自信をもとに就職活動を行って、希望の就職先に決まり、社会で立派に活躍している卒業生もいます。政策フォーラムへ参加することで自信を涵養させ、それを持って社会に出ていき活躍する人材を輩出していくことが、私の大東文化大学での役割ではないかと思い、これまで取り組んできました。

今回で私は「政治学インターンシップ（政策提言展開・登別）」には関与しなくなりますが、政策フォーラムへの参加意義が多くの受講生や教員に理解され、大東文化大学法学部政治学科の特徴ある学びとして末永

く継続していくことを願っています。また、政策フォーラムには、上記のような活用方法もあることをここに書き残しておき、次年度以降にご担当される先生に伝えさせて頂きます。

事務の方々を含めこれまで多くの方々に沢山お世話になりました。ありがとうございました。